

<今日の説教のポイント マタイによる福音書25章1～13節>

1. 聖書の中には結婚を題材にした多くの記述があります。それは主イエスの喩え話にも見られます。人格的交わりや信頼が不可欠である結びつきの中に、神はご自分の奥義を表しておられるからです。
2. (1～4) 花婿の到着を待つ10人の娘たちは、花嫁の付添人としての特別な立場を与えられています。ですがこの喩え話の中心は、花嫁ではなく花婿です。そして焦点は、彼の到着をいかに迎えるかにあります。主イエスご自身が、花婿としてもう一度おいでになる時のことをご自分で話しておられるからです。
3. (5～12) 予想外に遅かった花婿の到着間際になって、5人の娘はランプの油が足りないことに気付きます。間に合わず祝宴から締め出されてしまった不運な5人を主イエスは『愚か』と呼ばれ、手助けしなかったもう5人を『賢い』と言われました。なぜでしょうか？自分の務めを弁えていたからです。それは特別に選ばれて与えられた、その人自身のもので、頼まれても譲ることはできません。
4. (13) 大切なのはこの恩恵にどう生きるかです。花婿である主イエスの祝宴に、花嫁なる教会と共に与るという『約束』は、主の恵みに与っているという自覚と生き方により実現していきます。「目を覚ましている」とは、「約束に備えて生きる」という意味を持つのです。  
(使徒パウロの言葉、ローマの信徒への手紙13章11～14節を参照)